

帽子と鉢巻

飯沢 匡



光 文 社

読者へのお願い

あなたはこの本を読まれてどんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教え願います。御職業、年齢などもお書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三

光文社出版局

神吉晴夫

昭和三十三年九月二十日初版印刷
昭和三十三年九月二十五日初版発行 ©

定価三五〇円

長編小説 帽子と鉢巻

著者

飯沢 巖

東京都新宿区市ヶ谷左内町二丁目

発行者

神吉晴夫

印刷者

山元正宜

印刷所

三晃印刷株式会社
東京都文京区柳町二六

発行所

株式会社 光文社

東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚(94)一一〇〇—一九
振替東京一一五三四七

万一、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取りかえいたします。

(関川製本)

長編小説

帽子と鉢巻

装
丁

桜
井

悦

目次

パリ流し	五
貿易振興	二五
居ながら	四
西も東も	五
天涯の孤客	五
捨てる神	二六
日に疎し	二六
難波の芦	二六
新式画布	二五

石が浮く	一八四
焦熱騒動	二〇四
大和民族	二三四
暑中休暇	二四五
流行と女	二六五
国際泥坊	二八五
事件の渦	三〇五
巴里祭	三三五
白夜の下	三四五
帽子と鉢卷	三六五
あとがき	三七五

パ リ 流 し

「パリへ行きなさい！」

さすがの堅太郎も、ちょっと驚いた顔つきになって、父親を見た。

もう、この一年以上、堅太郎には気がついていいる父親の姿勢なのだが、今日も父親は、堅太郎とは反対の方向の壁に視線をやったまま話をする。

まるで、後めたいのは父親の満作の方のようだ。

それでも、満作は田村町の会社に出れば歴とした社長で、睨みも利かしてるのだが、今年とって満十九歳という息子の堅太郎の前では、からっきし勢いが無い。

「ねえ堅太郎！ パリだよ。パリへ行ってくれないか？」
(やっぱり、父親はパリといったのか。)

堅太郎は、はっきりわかると、あらためて、パリという言葉を考えてみた。

とたんに、いつだか見た「パリの真夜中」とかいいう色

つきレビュー映画に現われた胸の豊かで、むやみと腰の張った主演女優の姿が頭に浮かんだ。

と同時に、タイマツを空に掲げた女神像も思い浮かべた。

(ありゃロンドンだったかな。いや、アメリカか。)

そんな程度で、彼の世界地理の知識は、大いにあやふやだった。

「パリって、フランスだったな。」

堅太郎は、ひとりごとのようにいった。

それを聞いても、父親は、べつに驚きもしなかった。

堅太郎が、わざとばかばかしいことをいって、みずから卑下してるのだ、と解釈しているからである。

そうなると、ますます、息子のことが哀れになって胸がつまり、いよいよ、強い言葉が出なくなってしまうのである。

しかし、堅太郎は、正直な気持で、パリがフランスの首都であることを確かめたかったのである。

断わっておくが、堅太郎は低能児ではない。

そんなことは、きりりと引きしまった眉の根だけを見ても分かる。

長女、一人を除いては三人が年子、しかも、その四人

が全部、女という変わった姉妹を自分の上に持った堅太郎は、年ごろになると、妙な反抗児になってしまった。

そもそも長女から始まったのだったが、ちょうど、終戦の、何もかもアメリカ第一の事大主義のさなかに、この姉妹は、英語で有名なミッシオン大学に入学したのである。

それがきっかけで、つづいて二女、三女ということになって、四女が揃って同じ大学へはいって、しきりと成績をあげはじめた。

長女が首席で卒業すると、いきおい、二女以下もがんばるといった具合で、家中が才媛の空気でみちみちてしまった。

それが一人の不良少年を作ることになろうとは！

この四人の才媛を、両親が誇らぬはずはない。

だいたい、満作も北陸地方山間部の貧農の出で、ろくな学歴もなく、腕一本で押し渡った実業家だから、できのよい娘たちに、精一杯のわがままを許した。

有頂天になったのは母親のさつ子で、娘の揃って成績優秀なのは、自分の方の血筋だ、と主張しだす始末であ

る。

「あたしの方の曾祖父さんて人は、百姓でも国学をやつてね。短冊なんか書いたもんだそうだよ。」

三十一文字と英語と、どういう関係があるか知らないが、四人の姉妹は、大学から家に帰ってきてても、英語で会話を始めたのには、両親もめんくらった。

夕飯の食卓など、その英会話は、とくに賑やかなものだった。

まるでアメリカの基地が一つふえた感じである。

それでも両親は、ニコニコとして、満足気である。たまには、両親のあげ足とりも、四人は、やっている。

まだ中学にはいったばかりだった堅太郎にも、四人の会話はチンプンカンプンだが、勘のいい男だから、表情で悪口とわかる。

「何でえ、チイチイパッパの英語なんか！」

と、持ちまえの負けぬ気で、反発した。

「何です、堅太郎！ 早く、あなたも、お姉さんたちみたいに、英語でお話ができるようにならなくちゃ、だめじゃないの。」

と母親は、自分の批判がなされたとも知らぬ気である。

とたんに、長女の節子ふしこが額かぶたをしやくつて、堅太郎のことを何かペチャペチャと妹たちにいった。

いっせいに、三人の姉たちは、大声で笑った。

節子のつもりでは、特別悪意のあることをいったつもりではなかったが、堅太郎には、ひどく侮辱に感じられた。

かあつとなると、熱い吸物のはいつていた腕を、節子めがけて投げつけた。

火傷するほどではなかったが、額に思いがけぬ熱さを感じた節子はおおげさに騒さわぎたてる。

母親が泣き声を出して、うろたえた父親が堅太郎の横顔を張り飛ばす。そんな順序で堅太郎は、そのまま、暗い戸外に走りだしてしまった。

「ちえっ、姉さんたちが生意気だから、お父さんやお母さんの加勢をしてあげたのに……。」

堅太郎の少年らしい正義感、どうしても、自分が悪いとは、納得なちどくできなかつた。

靴下のままなので、夜の町の暗い所ばかりを拾って長いこと歩いたが、結局は、十一時近く家にもどつた。

「不良少年！ 末恐ろしい子供！ 野蠻人！」

そんな言葉が、四人の姉たちと母親の口から堅太郎の上うへにふりかかった。

早寝の父親が、

「なに、そのうち帰って来るさ。」と、さつさと床にはいつてしまつていたのが、堅太郎には、いくらかの慰めなぐさめだった。

翌日、父親は、簡単に、

「あんなことするんじゃないぞ。お姉さんにあやまりなさい。」

といっただけだったが、母親は、もっと、くどかつた。「あなたのような不良少年は、そういう人をあずかる所へでも行ってもらいます。節子姉さんはアメリカへ留学するかもしれない大切な身なのに、顔に火傷でもしたら、どうします。」

もちろん、節子の顔は無事だったが、堅太郎の誇りは、大火傷を負つてしまった。

それからというものの、四人の姉妹の堅太郎にたいする風あたりは、すっかり強くなった。

一つには堅太郎の方も、あやまらされたことがくやしくて、子供らしく、ことごとくに反抗したせいもあるが、

それにしても、毎晩の食卓の上の姉たちの賑やかな英会話は、食欲も減退するほど癪にさわたたのである。

わからぬながら聞いてると、ラジオの進駐軍放送やアメリカ映画の中の会話と大差ない滑かさ^{なめ}さと正確さでおこなわれているらしい。

そいつが、ますます堅太郎の反抗心をそそった。

「ふん、誰が英語なんか勉強してやるもんか。」

それまで、決して悪くなかった英語の成績が、目に見えて落ちはじめた。

「ちよつと堅太郎の英語みてやってちょうだいよ。」

母親にいわれて姉たちも指導に乗りだしたが、小鳥という発音だけでも堅太郎のは姉たちには気に入らず、二十回も言いなおさす。

こんな調子では、いつも終わりは喧嘩になる始末で、かえって反英語の気分をそそるばかりだった。

堅太郎の英語嫌いは、学校の英語だけにとどまらなくなつた。

何でも英語に関係したものは、すべて拒否^{きひ}するようになつて行つた。

世をあげてのアメリカン・デモクラシイ時代に、彼は

決然として鎖国政策をとることにしたのである。

今まで、ローマ字で自分の名をノートなんぞに書いていたのもやめてしまった。

好きだった西部劇映画も見かぎつて、そのかわりチャンバラに変えた。

野球も捕手だったが、ストライクとかファーストとかいうので、不愉快になつて柔道部にはいることにして、だいぶ、野球部の先生から怒られたりした。

彼の鎖国主義はしだいに度をすごして、地理、歴史、風俗、すべて外国のものは極力避けるところまで発展していった。

これでは、学校で教えるものも身にはいるわけがない。家の者は、急に学業不成績になつた原因が、そんな所にあるとは気がつかないので、ひたすら叱るばかりである。

「おまえのこの成績はどうしたんだ。姉さんたちをこらへん、あんなによく勉強して、揃つてみんな成績がいいんだよ。人間は努力すれば……。」云々と、どこの家庭の両親もやる例の訓戒が始まって、何の効果^{こうか}もあらうはずがなかった。

フロイト博士みたいな便利な両親がいればともかく、この木村家にかぎってそんなこともないので、悲劇は深まって行くばかりであった。

四人の姉妹は才媛独得の手取り早さで、堅太郎の学業不振は素行不良、つまり不良性から来るものと判断してしまつた。

西部劇をやめてチャンバラ劇、野球のかわりに柔道をはじめると、何となく雰囲気が右翼反動に近くなつて、アメリカのクリスチャニズムを信奉する女性たちには、不良に見えたのかもしれない。

「堅ちゃんみたいな不良にわかるもんですか。」とか、「だから堅ちゃんは不良なのよ。」

とかいう言葉が姉たちによつて使われはじめると、むらむらと堅太郎の反抗心が燃えあがつた。

「ようし、それなら不良になつてやるぞ。」

そんな決心をしたのは、中学三年のはじめであつたが、もう体格は高等学校上級に見える発達で、不良少年の資格には、事は欠かないのであつた。

決心をしなくても、こういう肉体年齢と精神年齢が不均衡な少年には、いわゆる不良少年に走る傾向があると

いつてよいのだろう。

堅太郎の不良化第一歩は、学校が終わつてから盛り場をブラブラと歩いてみるこゝだつた。

新宿の裏通りを歩いていると、堅太郎の風体に近い学生が同じように、何か期待するような顔つきで歩いている。

(いるな。)と思つた瞬間、向こうから、つかつかと寄つて来て……すべては定跡どおりであつた。

その喧嘩は、堅太郎に分が^{じやうき}あつた。

そして、その学生と仲よくなると、それが、なかなかの先輩で、何々組の兄さんに紹介してくれる。

その兄さんと一緒に歩いてると、映画もストリップ劇場も無料である。

中学は何か卒業したが、高等学校の入学は、満作が大骨を折らねばならなかつた。

金をずいぶん使つて、何とか押しこんだのだったが、堅太郎は、三日も登校しただろうか。そのころになると、家を出ると新宿へ直行して、何々組の兄さんたちの合宿所みたいな家へ通つた。

家庭では、自分の部屋の掃除もしたことのない堅太郎

が、兄貴分のギャバジンのズボンに丁寧にアイロンを当てたり、まめまめしく仕えたのだから、よっぽど、その兄貴分がえら者だったのか、でなかったら、この世界が、堅太郎の氣に入ったのであったろう。

家族の者は、まさか堅太郎が、そこまで不良化しているとは想像もしていなかった。

高等学校から無届の欠席続きについて連絡がある前に父母は警察署からの照会によって、堅太郎がカメラ盗難事件に関係者として検挙されたことを知らされた。

「なんだって、こんな子が生まれたんだらうね。」

母親のさつ子は、おろおろ声で家の中を歩きまわっていた。

父の満作は、またもや金に物をいわせて堅太郎の名が新聞に載るようにはさせずにすましたが、堅太郎をいかに善導するかについては途方に暮れてしまった。

同じ郷里から出ている知人に紹介されて高名な教育心理学の先生というのに相談すると、満作が考えもしなかったことをその先生はいった。

「お子さんは何か抑圧されたものがあるんじゃないですか？ 盗癖なんてものも、あまり金銭に厳重にするとこ

ろから起こるんじゃないでしょうか？ 問題のカメラなんてものは、このごろの青年はたいいてい持っています。一つぐらい持ちたいのは、べつにけしからん欲望じゃないと思いますかね。」

そういわれてみると、満作は堅太郎にカメラを持たせていないことに氣がついた。

「なるほどおっしゃるとおりです。あいつ欲しいといえは買ってやったのでしたのに……。」

「そりやそうでしょうが、不良化するような子供にはそれを切りだせない弱気なところがあるんですね。子供が自分の意志を親に伝えられないというのは、その家庭の空氣にも責任がありますね。」

「おっしゃるとおりでございます。」

満作は、すっかり反省して、また感心して、その高名な先生のもとを引きさがった。

だがありようは、堅太郎はべつにカメラを盗んだわけでもなかった。

第一、カメラなんて面倒なものは、いじりたくもなかった。

そのはずである。彼の鎖国主義からいってもカメラな

んて横文字のついたものは、さわるのも嫌だったのである。

仲間が盗んだカメラを贓品^{けいず}買いに売込むときに同道したというだけのこと、警察の取調べは参考人程度だったのである。

一日の留置で出てきた堅太郎に、満作は涙を浮かべて慈愛の手を差し伸べたので、かえって堅太郎の方で照れてしまったほどである。

「まあ何てあなたは甘いんでしょう。ますますつけあがりますよ。」

細君がいつても、

「おまえは新しい学説を知らないんだよ。」

ととり合わず、満作はとびきり上等のカメラを堅太郎に与えた。だが、堅太郎は、べつに嬉しそうな顔はしなかった。

警察に引っぱられたことが機会のうちに、堅太郎は、それっきり学校という所とは縁を切ったのである。

満作もあきらめた。

「どうだい。堅太郎、カメラマンにおなり。いい商売だよ。はでで当世向きの職業だからね。」

堅太郎はべつに父親に反抗する気配^{けいはい}は見せなかった。

そろそろ、半ば以上頭髪の白くなった父親が心配そうに何かいうと、すまないと思うのであった。

「うん、だけど、おれにやれるかな。」

いつのまにか「おれ」なんて言葉が自然に出てしまうのであったが、父親はべつに気にしない。

「素人から玄人のカメラマンになるのだって、いくらもあるそうだよ。要するに腹だね。事にあたって、うろたえない沈着さがあれば、いい写真が、とれるってことだよ。」

父親は、自分の会社の課長に弟がカメラマンになったのがあるので、その課長からの受売りなのである。

「そうかな、やってみるかな。」

「やってごらん、おまえは腹の方は、若いくせに、なかなかできてから、お父さんは、その点、大丈夫だと思ってるよ。」

こんなに大いにおだてるのは、これも、先日の教育心理学の先生が、

「まず、自信を持たせることです。」

といったからである。

しかし、堅太郎は、おだてに乗るような子ではなかった。

彼をふるいたたせるのは侮辱するにかぎるのである。そのかわり、ふるいたって走りだす方向は、とんでもない方向だということを承知しておかねばならない。

堅太郎はいっこうにカメラマンたるべくふるいたつ様子は見せなかったが、あんがい素直に、父親にしたがって、さる有名なカメラマンの事務所に行った。

父親のつもりでは、この有名なカメラマンの弟子にと思つてゐたのだが、いやに調子のいいカメラマンは、「まあ弟子といつても、こればかりは、才能の問題でござんすからね。まあ、あんた、じゃんじゃん撮つてね、作シンを持つてらっしゃいよ。見てあげますよ。」

そんなことをいって、適当にあしらうばかりだった。「じゃんじゃん撮る。」これを真に受けた父親は、毎朝会社に出勤するとき、まだ寝坊してゐる堅太郎を、たたき起こすのだった。

「さあ、カメラを持って、何か写しておいで、犬も歩けば棒にあたるだよ。今朝の新聞にも素人の火事の写真が出てるよ。」

「うん、撮るよ、撮るよ。」

堅太郎は、その高価なカメラをぶら下げて昼から町へ日課のように出かけるという、よい御身分になつてしまつた。

ブラブラと町を歩くと、足は自然に馴染みの深い盛り場の方へ向くのは、いたし方のないことだった。そこには、兄ちゃん連の溜り場所がある。

だが、父親の言葉も思ひだされる。

「堅太郎、お願いだ。学校へ行くのは、やめても、グレン隊の仲間になることだけは、やめなさい。わかるね。あんなものは、人間の屑なんだから。」

こう言いながらも、父親はちらちらと、堅太郎の顔色を、うかがつてゐた。

訓戒の言葉が強過ぎて、また反抗しはじめたら何をしでかすかわからない、という警戒心があるからである。

堅太郎は、ただ黙って、返事もしないでいた。

堅太郎のつもりでは、自分は、まだグレン隊の仲間になつていないのであつた。

ただ、グレン隊と一緒に遊んでいるだけの話だと思つてゐる。

たしかに、そのとおりで、本職の何々組の兄ちゃん連は、堅太郎を一人前のやくざに扱っていたわけではない。

上に頭の上がない三下の彼らが、ちょっと、兄貴ぶりたかったのと、堅太郎がいつも小遣を、ふんだんに、持っていたから、寄せつけていただけのことである。

だから、警察に検挙されて以来、堅太郎の足が遠のいたからといって、べつに、特別のことはなかった。

堅太郎が、高級カメラをさげて歩いていると、たちまち、兄ちゃんに会った。

「おい堅ちゃん、どうしたんだい。へえ、すげえカメラ持ってるじゃねえか？」

「うん、何か撮らなくちゃならねえんだ。」

「おれ、撮ってくれよ。おれの刺青はりものをさ。」

「へえ、はじめたの？」

「うん、十二社から一日おきに、刺青師はりものしが部屋に通って来るんで、みんな始めたんだよ。」

堅太郎は、その兄ちゃんと、何々組の部屋に行ってみた。

二階へあがってゆくと、ビリビリという妙な音がしている。

電気仕掛けの刺青の器械が、電磁石で振動する音である。

腹ばいになった男の背中に、中年の刺青師が、かがみ込んで仕事をしている。

写真を撮ってくれといった兄ちゃんがシャツを脱ぐと、まだ絵でいえば素描といった筋彫で、女と武士が、たがいに見合っている図が現われた。

「静御前しずみぎみに狐忠信きつねだてのぶだよ。」

と説明してくれたが、何となくへたな落書きみたいで、もっと、凄味のあるものを期待していた堅太郎は、拍子ぬけた。

兄ちゃんは行きつけの喫茶店の女給などに自分の刺青を自慢したいのだそうで、早く撮ってくれとせきたてている。

そんなことより堅太郎には、刺青師の仕事振りは、珍しい写真のネタになるような気がしていた。

堅太郎は、仕事している刺青師を、パチパチと七八枚撮ってみたのである。

それも、室内のことだし、露出がどうで、絞りがどうなんてことも、ろくすっぽ、見当がつかない覚束おぼつかなさで

あったが、幸い、いくらか写真術を心得た兄貴分が一人いて、

「フィルムは何んだよ？ え？ スリーS？ そうか、じゃ、開放で……そうだな。相当、相手は動いてるから、六十分の一か。」

といった調子で教えてくれた。

堅太郎は、それにしたがったまでだったが、D・P屋に出してみると、ちゃんと撮^とれていたのだから、このごろのフィルムは恐ろしい。

父の満作は、

「どうだね。何か撮れたかい？ 先生のところへ行って見てみたいよ。きつと、待っていらっしやるぜ。」と、うるさい。

まさか、堅太郎は、刺青師の写真を父親に見せる気はなかったが、例の有名なカメラマンなら、見せても、大丈夫そうな気は、していた。

というのは、そのカメラマン先生は、ヌードでもスケッチでも、相当な不遠慮なものを撮るので有名だったからである。

堅太郎は刺青師の写真を四つ切判に引きのばさせて、

カメラマン先生の事務所に持って行った。

カメラマン先生は留守だったが、助手があずかつてくれた。

その夜である。

カメラマン先生は興奮して満作に電話をかけてきた。

「お宅の坊ちゃんの作シン、なかなかいいです。第一、刺青師とは、目のつけ所がいいですよ。非情といいますかね。つまり、ドライね。やつぱり若い人には感覚的に、かなわないところがありますね。」

満作の耳には「非情」は「市場」と聞こえたが、いずれにしても、堅太郎にカメラマンの筋があることらしいので、ほんとうに喜んだ。

「それごらん、お父さんのいったとおりだろう。おまえは腹ができてからそんな珍らしい写真が撮れたんだよ。」

さんさん、はめちぎって、あとで小さな声で、

「でも、なるべく、そういう所へは今は行かない方がいいね。ろくなやつは、集まらないところだからね。」

というのを忘れなかった。

カメラマン先生は、堅太郎のその「作シン」を、カメラ雑誌に紹介してくれた。